

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雜誌第六二七号
平成二十六年五月二日発行(第四百十七卷第五号)

ホトトギス

五月号



俳句随想 〔三百八十三〕

汀子

一年の過ぎ行く早さに追いつけない日々である。仕事が溜まって行かないようにと思いつながらなかなか理想通りに事が運ばないのも仕方がない。気がついたらメモに書くようにしているが、「天地有情」の選をしなから、ここで書いて置かなければならないことをメモすることになっているが、そのメモが紛れてしまうことがある。

ここで七草または七種について申し上げたい。単に七草としたならば、秋の七草のことであり、秋の季題になる。一月七日の七種は「春の七草」とした場合だけ、新年の季題となる。七草だけにしたい時は、七種として欲しい。「芹、薺、御形、はこべら、仏の座、すずな、すずしろ」の七種類である。

文法は難しい。形容詞に「けり」は付けては間違いと聞いた。例えば、美しい……に「けり」を付けて「美しけり」とは言わないであろう。他の形容詞にも同じように「けり……」はつけると間違いになる。他にも気がついたことはここで書かせて頂くことにする。

これまで俳句の選者として知らなかったことは沢山あったが、皆様の選句をすることで随分勉強をさせて頂いた。今、歴史的仮名遣いの間違いが大変多い。一句の中に歴史的仮名遣いと現代仮名遣いが入り交じっていることがある。俳句は歴史的仮名遣いに統一して頂きたい。

句日記 汀子

平成二十五年五月四日 芦屋ホトギス会

夏霞 纏うても富士土所在なほ
今年又武具飾られてある宿に
ともかくも脱いだり着たり更衣
放談をすませ若葉の庭に出る
武者人形飾り迎へてくれし宿
朴の花咲かねば所在なかりけり
薄暑てふ自然に言へて今日のこと
咲き継ぎて今マロニエの花案内
青芝の庭とやうやく言へるほど

五月五日 下萌句会

快晴といふ心地よき夏に入る
初夏といふ解放感を纏ひ来し
薔薇園の蕾固しと戻り来し
次々と揃ふ人数 涼しき灯
会場の灯の涼しさに加はりぬ

五月六日 ロイヤル吟行会

旅心 薄暑の 風に誘はれて
健康といふかけがへのなき薄暑
薄暑ともいへる陽気のあとどり
日帰りの旅に用意の穴子飯
じつとしてのれば薄暑の遠ざかる
考への二転三転 穴子飯
もう風の素通りさせぬ 若楓

五月九日 清交社

香をほどくより薔薇園の人動く
とけ込みてゐて目立ちたる若楓
富士山の 払ひきれざる 夏霞
血の宮の 青葉を伝ふ 雨雲
淡路島覆ふ夏霧 抜けて来し
著我咲いて上皇の陵 淋しめず
白峯に 悲運の帝 偲ぶ 夏

五月十日 四国ホトギス同人会

マロニエの赤が街路樹なる街に
五月十二日 四国ホトギス俳句大会
快晴といふ母の日の贈りもの
海見ゆる若葉 明りの控へ室
五月十四日 大阪倶楽部
快晴の卯浪越えゆく 旅路あり
更たやうしたる 不安も旅のもの
更衣まこと 快晴なりしこと
新緑の 蔭の遊んでをりなも
アカシヤの花と 遊びしまでのこと

五月十四日 綿業倶楽部

葉桜の過去は語らずしづもれる
葉桜になりてしづけき心かな
散る風情忘れ吹かれて花は葉に
黄桜も 枝垂桜も 葉桜に
五月十五日 夏潮句会
心地よき新樹を渡る風纏ひ
マロニエの花散らす風揺らす風
風渡る 我も若葉の一部分
更衣せしとはつきり言へぬほど
更衣したる不安のあるうちは
吹き渡る風の涼しさ 全身に
五月十六日 クラブ合同
ひるがへるとき風薫る庭となる
筍の育ち 過ぎたる 旅帰り
この町の一筋 祭はじまりし
祭笛 乗せてくる風 消す風も
五月十八日 句会と講演の会
高野山 今ははるけき 朴の花
五月二十一日 有恒俳句会
零すもの木 洩日ばかり 葉桜に
初夏の旅 少し身軽くなりしこと
旅といふ 解放感の 更衣
花終へてもう 万緑の 一部分

更衣少し不安のあることも
どの薔薇の香といひ難し花巡る
五月二十一日 無名会
江戸つ子どこかに 田生れや祭来る
風戸が子ども祭 提灯見て通る
ともかくも祭 提灯見て通る
太陽の色を 深めて庭若葉
花終へて若葉の庭となりけり
どの木ともなく 加はりぬ庭若葉
急な客若葉の庭に 案内せん
五月二十三日 きとらぎ会
葉桜の木 洩日さへも消えしこと
更衣して 旅一つ終りたる
快晴の影 葉桜に 置き初めし

五月二十四日 時雨会

旅立は卯の花 腐し止まぬうち
卯浪越えゆける 旅路を折返す
まだ少し不安と言ひつ 更衣
稿債のための 早起き 明易し
更衣して 滞在の 滞在 明易き
更衣して 滞在の 長くなる
五月二十九日 春菜会同窓会
生き残る者の 集ひや 明易し
会ふことの 出来る 幸せ 梅雨に入る
生きてゆく 力尽きしや 梅雨 仏
華やかに 生きて 淋しき 竹の 秋
風 五月 仔細 分らぬ まま 仏
生きて 来し 証 残さず 露雨 仏
皆一つ 年を 重ね ぬ 露雨 仏
涼風に乗せた き 弔句 ありぬ べし
その 命惜しむ 涼しき 灯の下に
五月三十日 春菜会同窓会
待たれるし 会はや 別れ 明易し
梅雨荒るし こと なく 会の 終りたる
会うては や 別るる 梅雨の 灯を 明く
かの 日々を 知る者 同志 露涼し
遠き 日々を 引き 寄せ 夏の 稽古 会

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年五月二日 蕉心会

蚪蚪群れて尾だけ躍つてをりにけり
竹の秋とはさやさやとそよそよと
麗かに芥が釣れてをりにけり
行春の流れ凹ませ船の往く
春愁も水に投げ込みたる釣師
アスファルト割れ目親しき草若葉
水音のアインザッツに春惜む

五月三日 虚子記念文学館投句

若葉風纏ひ帰つて来る君

五月四日 菅屋ホトトギス会

更衣いよいよ酒の旨き日々

五月五日 野分会菅屋例会

更衣してあなたとはおしまひよ
滞在を一日延ばして更衣
みよし野に魂呼ぶ茅花流しかな
更衣ちよつとスカート長いんちやふ

五月九日 土筆会

給着て吉田小幸の現れさうな
余花に会ふことも吉野の風情かな
徳川の墓所てふ余花のありどころ
江戸の粹大坂の粹初鯉

一輪の余花といふ大宇宙かな

青畝句碑右近ガラシヤに風薫る

五月十二日 四国ホトトギス同人会 大会

五月二十一日 百夜句会

颯爽といそいそと夏遍路かな
新緑と哀史を抱く御陵かな
上皇の魂か鶯老を鳴く
麦秋やうどんの県といふ誇り
石垣を撫でて薫風曲り来る

五月十三日 朝日カルチャー若草句会

粽食ふ柱の疵の主は亡く

鳥賊火燃ゆ水平線に星沈め
衣更へて動きの速き副都心
更衣して朝帰りしてをりぬ
鳥賊火燃ゆ星との距離を縮めつつ
更衣妖しき君の勝負服

五月十六日 登高会

晴海より銀座へ茅花流しかな
大江戸へ小江戸へ茅花流しかな
更衣して本山の朝動く

母がまだ粽を結びし頃のこと
夏霞二つのタワー消ゆる都市
思ひ出を手繰り寄せつつ粽解く

五月十八日 ホトトギス社句会

五月二十八日 若水句会

日除して江戸の四百年の店
丸ビルといふ日覆の下を行く
日輪を閉ぢ込め朴の花眠る

五月十八日 航空自衛官の友人送別

新茶汲み三十年の夫と妻
旅に来て立夏の風の甘さかな
新茶淹れホトトギス社で待つてます
揮毫する筆の先より夏に入る

大空を統べ薫風の飛翔かな

五月二十九日 和塾

城薄暑やつぱり僕は豊臣派
聖マリア大聖堂に若葉風

五月十九日 伝統俳句協会関西支部大会

更衣 東京 都内 白くなる

更衣 今日 は カテドラルの 弥撒へ

五月三十一日 カトリック新聞選者吟

雑詠

廣太郎 選

花嫁の母とは笑顔冬薔薇 龍ヶ崎 今橋眞理子

花嫁の父とは冬日濃く引きて 同

冬帝の日ざしの中を歩み出す 同

急ぐまい虚子のしぐれに濡れながら 袖戸 山西商平

はらと雪ふりそめてみるみるうちに 同

嫁が君ひよつこり猫はまどろんで 同

音もなく去年の今年となりにつけり 東京 田丸千種

冬帝の微塵の雲も放たざる 同

寄り道をしながら太る雪まろげ 同

霜月や祝ぎ多き日を重ね来て 神戸 千原叡子

咳一つにも注目の新主宰 同

濃紅葉に涙されたる虚子のこと 熱海 嶋田一步

水仙の花の向き向きありて壺 同

たつぷりの葉が花掲げシクラメン 同

山百合の通り過ぎたるより香り 同

松飾 古都千年の門構 奈良 古賀しぐれ

寺領なる松もて坊の松飾 同

底冷の古都しづけさの底にあり 同

雪女撞きたる鐘か風音が 長岡 安原 葉

深々と更けゆく闇に雪女 同

ぬくぬくと肥えたる寺の寵猫 同

散り敷ける神の紅葉の綺羅を踏む 福山 竹下陶子

神の凍て浴びて眠れる蟻地獄 同

世に立てる心とてなき案山子かな 同

勅使門閉ざす門朴落葉 神戸 山田佳乃

双塔の一つ陰りぬ空也の忌 同

ねんねこやいたづらな手のまた伸びる 同

十二月改札口に始まれり 同 藤井啓子

新宿のビル街に住む鎌鼬 同

凶書室の灯を守りをり去年今年 同

駅前の引力強しおでん酒 東京 河野美奇

ちび猫の降りて来られぬ冬木かな 同

解体の邸冬木の残されし 同

鶴を見る鶴のやうなる一詩人 熊本 岩岡中正

夕鶴の空の匂へるごとくあり 同

鶴唳に朝の力のありにつけり 同

掃初やくれなみの糸屑ひとつ 神戸 立村霜衣

繭玉の白すがくし紅やさし 同

餅花のどこかが揺れてゐる真昼 同

青空も夜空も流れ行く冬木 袋井 湖東 紀子

おでん屋に客送り込む風となる 同

空間の歪む一瞬鎌鼬 同

雑詠句評(四月号より)

さい雪・純也・雅

くに彦・仁義・比奈夫

公次・佳乃・しげ人

一步・廣太郎

押し寄せる人皆黙し風の盆 周南 小川龍雄

風の盆と言えば小説にも書かれ、歌謡曲にも唄われ、今では全国から観光客が押し寄せる、越中八尾の二百十日の荒れを鎮める事を祈願する祭。夜が更けるほどに舞台で踊っていた連が町流しへと繰り出す。おのこ踊は勇壮に、おみな踊は嫺やかに胡弓の音と共に何とも言えぬ哀愁を醸し出す。所謂賑やかな祭とは違い、しっとりとした哀感が町中に漂い、観衆は黙って聞き入りおわら独特の節回しに魅了されるのである。ホトトギス千四百号祝賀会の舞台とフロアーで演じられた踊では、汀子先生には曾ての思い

出入りだっただけではないだろうか。(さい雪)

平成二十五年十月二十七日の「ホトトギス創刊壹千四百号記念祝賀会」で踊られた「風の盆」は華やかであったが、筆者が現地である越中八尾で見た時は、正にこの句の雰囲気であった。夜の闇の中、という事もあったのだろうが、不思議な静けさをも感じたのである。この踊の神髄であろう。(廣太郎)

虚子西へゆきし銀河に従はん 福山 竹下陶子

「虚子一人銀河と共に西へ行く」という虚子の句を踏まえた一句である。老漕といつたところであろうが、余裕が感じられる。銀河とともに西へ従えば、虚子に会えると信じておられるのかもしれない。(純也)

虚子を慕う気持が一心に表れた句である。勿論御本人はまだまだお元気で、虚子の花鳥諷詠を広く伝えられるファイトもお持ちであるが、ある意味で枯淡の境地も開いておられるのである。虚子という手本を、虚子の句を通して、これからも歩んで行かれる希望溢れる句である。(廣太郎)(以下略)

天地有情

この村に未だ馴染まず日向ぼこ
 梟が啼きむささびの飛ぶところ
 終戦の日の我が影の濃かりけり
 三瓶野やべがより銀河流れ初む
 去年今年うらやましきは汝が未来
 初詣より戻り来し娘の気配
 雨の日の夕は早し散紅葉
 時雨るるや越に旧りゆく俳諧寺
 爆撃の業火のむかし曼珠沙華
 はなむけの心切なる百日紅
 時雨るるや花鳥諷詠庶民の詩
 竈猫自慢の髭を焦がしたる
 六甲も摩耶もわが山初明り
 背山よりいつもの声の初鴉
 悔ゆること一つならざる古曆
 年内に話つかざることばかり
 母よりも祖母思ひ出す近松忌
 道を聞く人としてをらず枯野径

群馬 中杉隆世
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 同 今井千鶴子
 長岡 安原 葉
 同
 福山 竹下陶子
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 同 三村純也
 東京 河野美奇
 同

露の臺むらさき被りまだ小さし
 晴れてゆく明日を約して余寒急
 夜の句座へ師走の橋を渡りけり
 ゆく年の水平らかに鳥のこゑ
 羽子をつくときどき新幹線通る
 見えてゐる富士より高く羽子をつく
 北風に向かうて力得たやうな
 人恋し街の灯点り冬の雨
 結婚式終へセーターの二人かな
 極月といふに大きな頼みごと
 呼ばれても聞こえぬふりのかまど猫
 もうすでにつまづいてゐる年用意
 数へ日のだんだん数へ易くなる
 朝風呂に入り冬至の日と気付く
 大年の風の収まる朝かな
 冬空の何か忘れたやうに青
 これと言ふ思案もなく日向ぼこ
 枯草に座りてをれど闘志あり

榎原 稲岡 長
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 熱海 嶋田一步
 同
 東京 岩村恵子
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 東京 山田閨子
 同
 神戸 後藤立夫
 同
 同 湖東紀子
 袋井
 同
 熊本 永野由美子
 同

心子選

師走

稲畑汀子

忽ちやって来た師走であった。まだ仕事で上京するのが三度九州ホトトギス大会の旅も残っている。手許に預かっている仕事如山のようにある。おまけに来年一月にNHK出版から『俳句十二か月』の第二弾『花鳥諷詠そして未来』を急遽出版することが決まり書き足す原稿やその校正の打ち合わせで大忙しであった。

師走に入って最初の金曜日、金子さんが朝日に到着するなり、「エスカレーターの上りで後ろへ倒れて復頭部を打ったけれど後ろの人が受け止めてくれたので大丈夫だった。帽子を被ってたしね」

「危ないじゃないの。手すりを持たなきゃ。気をつけなきゃだめよ。でも大したことなくてよかったわね」

「は、は、は」

私はその日は日帰りで芦屋に帰った。伊丹の空港に着くと車の停めである駐車場へと急いだ。車に近づいて何時ものように車にタッチすると鍵が外れない。

「えっ？」

鍵が開かない。

「えっ？」

もう一度、タッチするとがしゃーつと開いた。

「やれやれ。そろそろ電池が弱っているのだわ」

車はスムーズに芦屋へ走ってくれた。

芦屋に帰り着いた私は早速塚本さんに電話をした。

「早いほうがいいでしょうから、日産の井上君に電池交換に行ってもらいましょう」

「よろしくお願いします」

早速来てくれた井上君と一緒に突っ掛けを履いてガレージに向かった。スペアの鍵も電池を換えて貰うと、私はガレージの扉を閉め玄関に引き返した。慣れた玄関である。突っ掛けが脱げそうになりながら玄関の石段に足を上げた。

「あー！」

体がもんどりうって前にのめった。がん！おでこをいやつというほど打った。

「やっちゃった」

足許に油断があった。一人である。立ち上がって玄関に入ると鏡の前に立った。おでこが大きく腫れている。

タオルを絞って顔を覆った。気持ちがいい。安楽椅子に腰を下ろし目を瞑った。

「あーあ」

何度もため息をついた。

日曜日は下萌句会である。

「先生、どうしはったのですか？」

「又、転んじやったのよ」

「へー、冷やさんと」

「冷やししてるわよ」

師走も押し詰まった金曜日は年末の混雑もなく案外早く朝日新聞に着いてはっとした。早速仕事に入る。

「宇佐美さん、はい、新春詠をお渡しします」

「有難うございました。汀子先生らしい俳句ですね」

「新春詠は前もつて作るので難しいわ」

三週間経った頃、殆ど顔の紫色が下に下りてきておでこの瘤も小さくなった。普段は外している眼鏡をかけていると、殆ど気がつかない。

今年最後の朝日俳壇の選考会に出席した。

「金子さん、エスカレーターで転ばれたでしょ」

「はいはい」

「あの日、私も我が家で転んで顔がお岩さんのようになったのよ。ようやく治ってきたけど」

「へー？あんたは、お転婆なんだな」

「そういえば、あわて者かもね」

新神戸で新幹線に乗ると四時間足らずで出水の鶴の越冬地へ着く。今年最後のホトトギス俳句大会である。

出水に降り立った私たちをお迎え下さった藤武さんの笑顔に私は元気に挨拶した。内出血の跡は殆ど消えていたが眼鏡は外せなかった。

